成人期男性の ADHD における WAIS-III のプロフィール特徴

○久保 りつ子・牧原 寛之 (非会員)

(牧原クリニック)

キーワード: 注意欠陥/多動性障害、成人期男性、WAIS-III

WAIS- III profiles in men with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder

Ritsuko KUBO, Hiroyuki MAKIHARA[#]

(Makihara clinic)

Key Words: Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, Men, WAIS-III

目 的

注意欠陥/多動性障害(以下 ADHD)は幼児期から学童期にかけて目立つ発達障害であるが、成人期になって学校や職場での不適応から、ADHD が疑われて受診する症例も少なからず存在する。我々はこれまで成人期女性の ADHD に注目し WAIS-III の分析を試み、言語性尺度と動作性尺度、あるいは群指数間のディスクレパンシーについて検討し、言語性が優位であり、知覚統合と処理速度などに問題を持つ傾向があることを報告した。(久保ら, 2014) 今回は成人期男性の ADHD を対象とし、そのプロフィール特徴について分析する。

対 象 と 方 法

対象: 当院を受診し精神科医が ADHD と診断、WAIS-III を実施し、IQ が正常域にある成人期男性 5 名(16~26 歳)であった。方法: DSM-IV-TR、Utah criteria に基づいた ADHD チェックリスト並びに WAIS-III、バウムテストを実施した。WAIS-III は個別に分析した後、5 名の平均値を出し、WAIS-III の統計値と比較した。また昨年調査した成人期女性の ADHD (以下女性群)の WAIS-III の結果と比較、検討した。

結 果

1. 対象の分析

DSM-IV、Utah criteria の ADHD チェックリストを施行したところ、被験者 5 名のうち、4 名が不注意優勢型、1 名が混合型の ADHD に分類できた。

2. 言語性尺度と動作性尺度の比較

被験者全員の IQ を平均すると言語性 IQ108、動作性 IQ94、全 IQ104 であった。被験者 5 名中 4 名が言語性優位であり、このうち 3 名は言語性 IQ (以下 VIQ) と動作性 IQ (以下 PIQ) の間に 5%水準の有意差が認められた。また動作性優位の 1 名にも 5%水準の有意差があった。

3. 群指数間のディスクレパンシー

5 名を個々に見て行くと、群指数差 6 項目の内、5~15%水準の有意差がそれぞれ 3~6 項目に認められた。また群指数を平均し、ディスクレパンシーを調べると、図 1 の通りであり、3 項目間に有意差が認められた。

図1. ディスクレパンシー

VIQ108 - PIQ 94	14 ※※
VC 107 - PO 104	3 ns
VC 107 - WM 98	9 ※
PO 104 - PS 89	15 ※
VC 107 - PS 89	18 ※※
PO 104 - WM 98	6 ns
WM 98 - PS 89	9 ns

※※p<0.05 ※p<0.15

4. 下位検査における特徴

言語性尺度で 5%水準の有意差のあった下位検査は「単語(ss13.4)」「理解(ss14.6)」であり、この 2 項目は高い評価点となった。一方、有意差までは出なかったが「教唱」の平均は ss7.4 と低い値となった。また動作性尺度では、有意差が出た下位検査はなかったが、「絵画配列(ss7.8)」と「記号探し(ss7.6)」は、いずれも平均評価点は 7 点台となり、平均を越えた者は両検査とも 1 名のみであった。

5. 成人期女性の ADHD との比較

今回の被験者(以下男性群)も女性群(VIQ105、PIQ88)と同様に言語性尺度が有意に高かったが、群指数では知覚統合(以下

PO)で違いがあった。(男性群 PO104、女性群 PO85) また下位検査では、「算数」の評価点が男性群 ss11.8 に対し女性群 ss7 と、4.8 の開きがあった、その他評価点に 3 以上の差があったものは、「絵画完成」(男性 ss10.2>女性 ss6.7)、「絵画配列」(男性 ss7.8<女性 ss11.2)、「積木模様」(男性 ss11>女性 ss7.5)であった。

考 察

まず、VIQ と PIQ を比較すると、被験者の 4/5 が言語性優位であった。これは女性群と同様の結果であり、言語理解、表現にはほとんど問題がないと考えられる。

次に群指数を見ていくと女性群とは異なり、PO が高く、視覚的情報を整理し利用する力には問題が少ないことがうかがえる。ただ群指数間のディスクレパンシーは顕著であり、言語理解(以下 VC)に比して処理速度(以下 PS)と作動記憶(以下 WM)が、また PO に比して PS が優位に低いことが示された。(PS「符号(ss8.4)」「記号探し(ss7.6)」)これは成人期 ADHD の WAIS-III についての「VC、PO に比べ、WM、PS が低い」という見解と合致している。(大六, 2011) つまり言語理解力や視覚情報を整理する力は有していても、視覚刺激を操作する速度が遅く、特に書いて表現することが不得意と考えられる。

さらに下位検査をみていくと、「単語」と「理解」の評価点が高く、先述の通り語彙数が豊富であり、状況をイメージし常識的な判断をする力に優れていることが解る。女性群と異なる点としては、「算数」の評価点が平均を越えていることであり、算数的な発想が可能であることがうかがえる。これには、男性群では PO に問題が少ないことが好影響していると思われる。つまり視覚的な情報を整理する力を有していることが、算数でのイメージのし易さ、見通しの立ちやすさにつながっていると考えられる。ただ「算数」では 4 名の被験者が一度で問題を聞き取ることができなかった。これは「教唱」での低値とともに、注意力の問題が影響していると考えられる。さらに女性群と比較では「絵画完成」が高く「絵画配列」が低い値になったことも特徴的であった。つまり 1 枚の描画の中の肝心な点に注目することはできても、複数の絵カードから脈絡や継時的変化を読み取ることは不得手とすることがうかがえる。このため状況を読み行動することができず、不適応を起こしやすいのではないかと考えられる。逆に「積木模様」のようにモデルがあるものに関しては、その構造について見通しを持ち、構成することができていた。

以上のように、成人期男性の ADHD の WAIS-III にても、被験者の注意力の問題や能力の個人内差が顕著に示される結果となった。男性群においても、真面目に思索し、ものごとに真剣に取り組もうとする意欲は認められたが、実際には考えたことが思い通りに具現化しない経験を重ねていることが推察できた。ただ今回明らかとなった性差については、今回のデータのみでは ADHD 特有とはいえず、今後、さらに検討する必要があるものと思われる。